

飴色の窓

—受賞作品概要

野元 正

レールの匂い

朝の通勤ラッシュに新快速はもう十分近く駅に停まっている。上り方面で人身事故があり、運転再開の目途が立っていない。背が高く痩せている主人公祐一は、ひとりの人間が世の中から去った、と会ったこともない人の気持ちに思いを馳せるところからこの小説は始まる。彼は地方公務員で市役所に勤めている。現在の仕事は緊迫した市財政を救うため、事業用地を売却することだ。

今日は午前十時からあの海辺の埋め立て地の打ち合わせがある。それまでに市役所に辿り着けるだろうか？ 乗客の声はあまり聞こえない。静かだ。「もっと安くせいや？ 売れた方がいい

つ気持ちがずっと続いていたせいもあるが、その溝の深さに気づいて家庭に自分の居場所があるのだろうか、と考えるようになった。

そして家の中で別れて十八年経つ。ふと、祐一は線路の鉄粉のにおいを思い出していた。この電車に乗るとき、かなり濃いレールのおいがあった。祐一には仕事もうまくいっていても心も元氣なときはいい匂いに感じる。しかし今日は嫌な臭いなのだ。

ほんの少し前、ようやく前照灯を輝かせて電車が来た。一瞬祐一は目が眩む。ふっと、線路に飛び込みたくなった。すべてを投げ出し、どこか遠くへ行きたいとおもった。しかしどこへ行くか、そのあてさえないことに気づいて、彼は情けなくただ呆然と電車をやり過ぎた。

つり革につかまり、朝から仕事のごたごたに苛まれながら、ぼうつと眺めていた景色を下り電車が入ってきて、遮った。今まで見えていた駅前にある城跡の白い櫓や紅葉しかけた森や柳鼠色の堀が消えて、窓外は白と黒が目立つ飴色になった。

んやろ？ 置いておいても焦げ付くだけや。緊迫した市の財政も潤うんっちゃあか？ あんた、この仕事、むいてないなあ」

市議会でも法一で名の通っている市議山田法一の芝居がかった声が耳の奥で聞こえる。

「なぜ断れないんや」
上司の叱咤も聞こえる。それなら直接法一へ伝えてください、なんて応じようものなら、「それは君の仕事や」と逃げ

祐一にとつて家庭も安眠の場でもなかった。両親は病気で早く逝った。天涯孤独の彼は暖かい団らんを夢見ていた。

「おまえ、彼女と別れたんやろ？ K女子大学園祭へいくんやけど、男がひとり

さらによく見ると、下り電車の窓ガラスに映っているのは自分の顔だった。

下り電車も事故の影響を受けてか、発車の気配さえない。駅の放送は錯綜して聞こえてくる。祐一は下り電車の窓に映った自分の顔が窓枠に次第に馴染んでいくのを感じていた。心が向かいの電車に乗り移って取り留めもなく彷徨い、浮遊し始めた。

青い麦藁帽子

浮遊する心が走らせる下り電車が停まった駅は単線の小さな駅だった。祐一はホームから海が見える駅に降り立った。

駅の出口近くのホームに青い麦わら帽子を被った女が立っていた。その帽子に見覚えがあった。彼が生涯忘れることができない昔の恋人美代子だ、とおもった。あれからもう二十年は経っている。結婚して離婚した。そこまでは知っていたが、それから後は知らない。

「浜へ行くこっちゃ」

美代子が先に立った。狭い階段を下りると、潮の香と潮騒が高まった。潮が満

足らんのや。頼むワ」

祐一は眞数合わせの合コンに胸に空いた隙間を埋めるおもいで参加し、少し浅黒い感じの大きな目がよく光りポニーテールが似合う八江と知り合った。彼女はハウス栽培農家の娘だった。そしてできちゃった婚をして双子が生まれた。初めはうまくいっていたが、時が過ぎて落ちていくところから微妙な心のずれを感じるようになる。そのずれは賞味期限の切れたパンに発生したカビみたいに彼の心を次第に蝕んでいった。

祐一は八江との間の、ものの見方や価値観の違いに心のわだかまりとストレスを溜めていった。そのおもいは双子が育つにつれてますます強くなった。そして最近では仕事の行き詰まりもあつて苛立

ち始めている。祐一はか細さを感じる後ろ姿に従って降りた。その後ろ姿を見ると、美代子のいるところが祐一の居場所のような気持ちになった。すべてがここから始まったようにおもえた。「オレ、あんとき、祐一を待ってたがや」

美代子は階段を降りきったところで振り返って言った。

「もうだめになったと、おもったんや」「そんなことないがや、そうやったら、母ちゃんや父ちゃんに会わしたりせんがや」

祐一は美代子の消息が分からなくなつてから、二十年が過ぎた。美代子はどうに忘れてしまったかもしれないが、女々しい男だからか、あるいは添い遂げられなかったせいかわ、祐一は心の奥の方から取り返しつかない哀しいおもいととも今でも美代子へのおもいを断ち切れな

八江には悪いが、美代子とともに歩めなかったことが、現在のよりどころのない空しい気持ちを助長しているのではないかとおもった。あのとき、彼はなせもつと慎重に美代子を待つてやれなかったかだ。自分の立場や考えにこだわって、もうだめや、と勝手にあきらめ、美代子と連絡も取らず、追いかけて彼の気持ちを解つてもらおうという努力もせず、彼女から何か言ってくるべきや、とすぐにも会いたい気持ちを意地という厄介なおもいで鑑つてしまった。祐一は自分のおもいの狭さと移り気な軽薄さがたまたまなく嫌になった。そしてこの中途半端な彼の性格が八江の心を干涸らびさせたのかもしれないと気づいた。すべてがここから狂いはじめたのだろうか。自分の周りの人たちをすべて不幸にして、彼だけ安全なところに身を置いている計算高い男におもえた。

美代子は母が子宮癌で入院した病院の看護学生だった。彼女は母の面倒をよく見てくれた。そんな母もやせ細った顔に笑みを浮かべて逝つた。

い列車は父母の墓のある駅を通る。

何年かぶりで祐一は娘のサキと一緒に詣でることにした。東京出張の機会に泊すれば、何とか行けるのだが、小さな軌道車を何回か乗り継がなければならぬことが祐一を億劫にさせていた。いつも気になってるが、なかなか行けないでいた。

「今年も咲いてるやろか？」とサキが聞いてきた。

「何が？」

「ほら、おばあちゃんのお墓に行くとき、田んぼの畦に咲いてたやろ？ 赤い花

……」

「ああ、咲いてるやろな」

「なんであんなに赤いん？」

「知らんけど、あれは血の色やと思ってる」

「それ分かるワ。……、何とのおう哀しくなるもん。昔なあ、あそこで何か起こったんやろか？」

「そうや。血が流れた跡にあの花は咲くんやて」

祐一には「曼珠沙華」の赤は嫉妬の色

その夏、母の初盆がすんだ後、祐一は美代子に誘われて島に行き、彼女の実家に泊まった。美代子の母は島一周の漁船を雇つてくれたり、漁り火の見える浜辺へふたりを行かせてくれたりした。

島から帰つて祐一の美代子へのおもいはさらに募つた。

朝夕の冷え込みが身体に感じられるようになったところ、どうしようもなくなつて彼は毎晩、看護学校の寮にいる美代子に電話をかけたが、

「とにかく迷惑ぢや」と美代子の声がかすれた。

やがて祐一は美代子に高校時代の親友、山下を紹介する。二人は映画や音楽の趣味があつて祐一に隠れて付き合ひ、祐一がそばにいないかのように夢中になつて話している。

二人は祐一を裏切る。美代子と山下が笑顔で手をつないで歩いているのに偶然出会つたのだ。

言ひようない怒りが祐一の心を満たし、絶望の気持ちが彼を直撃し、山下と絶交したが、祐一は心のなかで、悪いのは美

に見える。

ふと、祐一は八江に包丁で追いかけられたことを思い出していた。青い麦藁帽子が忘れられない祐一は仕事に疲れると夜の雑踏を彷徨つた。どうしようもない疲れと乾きを抱えて祐一はただひたすら歩く。このまま何処かへ行きたい。あてもなく行きたい、何んも考えなくても何処かへ連れて行つてくれる乗り物はないのやろか？ 銀河鉄道のように……。

そんなとき、祐一は職場の若いアルバイト由理と、仕事の帰りに京都の送り火を見に行つた。

間近に見える大文字山が点火され、燈火規制された闇が炎に染まった。由理の横顔が炎色で縁取られた。

「今夜帰らなくてもいいわ」

由理は五山のすべての火が消えたとき言つた。

彼の心としっくり合う、気の合う相手求めて彷徨つている。自分の居場所さがしに由理をつき合わせているのかもしれないとおもつてた。それでも由理と何処かへ行つてしまいたい、とおも

代子や、と叫んでいるのに、山下だけに非を押しつけ、美代子を責めたいくせに責めもしない矛盾に気づいていながらふたりの仲を温存し、修復するために美代子には一言の非難も口にしなかった。どこかで決定的な言動を避けていたのだ。

祐一は踵を返すと、走つた。

「許して……、オレが誘つたがや」

美代子の声が追いかけてきた。祐一は振り返らなかつた。

祐一は小さな駅に戻つてバス停のようなプラットホームに立つていた。時間表は白いペンキが剥げ落ち、錆が浮き出ている。

それは祐一の遠い夏の思い出だ。しかし今でも彼の心のなかで鮮明に生き続け、何をするにしても彼の原点だった。「青い麦藁帽子」とは、「となりの芝生は青い」と似て、去つていった思い人がいつまで経つてもよく見えることを象徴している。

曼珠沙華

空想と妄想の代金を払つてしか乗れない

心を彼はどうすることもできなかつた。

暗い山道を降りるとき、気がつくとも由理が彼のそばから消えていた。ふたりははぐれたらしい。祐一は彼女らしい影を探した。由理のいるところに祐一が探しているこれからの未来があるような気がしていた。

そのとき、暗闇から由理の声がしたようにおもえた。

「ここや」祐一も叫んでいた。黒い群衆から戻つてくる白い影が見えた。由理に違いないとおもう。祐一は愛おしくなつた。闇に両手を広げる。暗くても由理を識別できた。

ふたりは黒い群衆の流れから抜けて鳥居の陰に抱き合つたまま逃れ、長いキスをした。

帰宅したとき、午前0時を過ぎていた。家は内側からしか開かない鍵がかかつていた。娘の部屋に石を投げて開けてほしい、と頼んだが、

「いやや、母さん許さへん、つて言つたよ」

「頼むワ」祐一は拝むようにサキに手を挙げる。

ようやく玄関に明かりが点った。

いつの間にか微睡んだようだ。

祐一は息苦しきを感じて目が開いた。

漆黒の闇は八江が手に握りしめた刃を感じさせた。

祐一は跳ね起きた。

真夜中の闇に閉じ込められて必死でドアを包丁の柄で叩く八江の気持ちは祐一はおもいやった。もちろん悪いのは彼だ。しかし、八江は由理の存在を何にも知らないはずなのに、彼女は何かを感じたのだろうか？ 由理の匂いか？ 祐一の普段と違う気配か？ 今夜由理とはおもいとどまったが、心のなかでふたりはずでに寝たのと変わりが無い。女と寝てきた男は気配で分かる、と何かの本で読んだことがある。暗黒の中でかえって帰ってきた祐一の心が他の女で満たされていることを八江は敏感に感じ取ったのかもしれない。妻である彼女の入り込む隙間さえないことを……。そのことが八江の心を静かに狂わせ、包丁の切っ先に怨念を

もう何年も前からそこにあったように馴染んで見えた。

椅子はまるでそこで一休みして、それから何処へ行くのか考えてみなさいよ、と祐一に言っているみたいだった。

ここは岐路なのだ。美代子のときも、八江のときも、由理のときもすべて祐一はこの原っぱの道を通って始まった。それにユキオやサキの進路を決めるときも重要な分かれ道だったとおもう。

祐一は大学受験に失敗して一浪したとき、この原っぱの広場で進路を決めた思い出があった。

「あなたはお父さんの跡を継がなくてはならないわ」

祐一の母は医師だった父の跡を継ぐように迫った。しかし物理が苦手な祐一には無理だった。

祐一は台風の影響による暴風雨の原っぱに立っていた。彼は海から潮風の幕になって吹きつける暴風雨に目が開けられないでいた。しかし彼の気持ちは必死で暴風雨に立ち向かっている。何処へ行くのか、何処へ向かうのか、独りで決めな

込めさせたのだろうか？ 確かに今夜の祐一の心は八江へのおもいのひとかけらさえなく、若い由理で占められていた。

しかしドアを押さえながら、八江の思わぬ激情に祐一は戸惑っている。彼は八江の切っ先の意味を感じていた。すまないという気持ちも何処かに残っていたし、八江の気持ちを、美代子をおもう彼の気持ちと置き換えれば、十分理解できることだった。親友と恋人に裏切られ、夜叉の心に似た燃えたぎるおもいを独り忘れなければならなかったあのとき。それは八江のおもいと同質の深い嫉妬に根ざしている。しかし、祐一は自分のことは理解できても、八江に対する深いおもいやりを欠いた。それは祐一が美代子に植え付けられた苦しみから逃れるための冷たさ故だ。八江は身内から嘔き上がった、押しとどめることの出来ない切羽詰まった衝動に突き動かされて、闇夜を彷徨う夢遊病者のように、包丁の切っ先と心と力を込めて祐一の心を突き通し、彼女の方へ振り向かせたい、と恐らくおもったのだろう。

ければならないとおもった。

息子のユキオは二卵性双生児だったせいか、生まれつき小さく、未熟児に近い状態で生まれた。すぐにはないが、三ヶ月検診で右耳が生まれつき聞こえないことが分かった。

「それなあ、おまえの家の血ではないんか？ 耳の悪い人いたよな」

祐一は決して言うてはいけないことを口にした。それは今でも後悔している。それなら祐一の家には遺伝的には何の心配もないのか？ そんなこと分からない。祐一が知らない、隠された血の呪いがあるかもしれないのだ。八江やその一族をどれだけ傷つけたかわからない。祐一には軽い気持ちで言うてはならないことを言うてしまう癖があった。言動には気をつけようとおもいながら、ふと漏れる言葉は他人を、八江を、傷つけた。

そして今、ユキオは祐一が押しつけたわけでもないのに、医者への道を志していた。彼は自分の右耳が聞こえるように治すんや、と耳鼻咽喉科医をめざしている。しかしただの耳鼻咽喉科医でなく救急医

ドアの向こうが急に静かになった。そして八江のすすり泣きが聞こえた。

辻の椅子

次の駅は昔から祐一が住んでいる町の最寄り駅だ。今は高架駅になっているけれど、心のなかを走る列車が着いたのは郷土の写真集で見た懐かしい昔の佇まいの駅だった。

その町には祐一が気に入っている原っぱがあった。

原っぱにすすきの穂が目立ちはじめ、風が銀波を渡るころ、原っぱの入り口に木製の椅子が捨てられた。以前、粗大ゴミは無料で廃棄できたが、有料になってから不法投棄が増えた。この椅子も処分困った誰かがここに捨てたのに違いない。しかし祐一はその椅子が気になって仕方がなかった。ところどころに精巧な彫刻が施された、焦げ茶色の椅子は傷もなく、まだ十分使えるし、なかなか素敵だ。

祐一は家に持ち帰って使いたいとおもった。

もできる医師を目標にしていた。図らずも祐一が選ばなかった道だ。

「現場で大丈夫か？」

「ああ、調べたけど、片耳が聞こえなくても医師にはなれるんや」

ユキオの顔が輝いた。祐一は俺のせいかもしれないハンディキャップを一言も責めないユキオに心で頭を下げた。

心のなかを走る列車の時刻が迫っていた。八江と祐一の心の間に亀裂ができた原因を彼は考えていた。やはりあの事件は大きい。今でも祐一はこのことだけは八江を許せないのだ。

列車は祐一の意識のなかのレールを走っている。何処でも行ける。時も場所もはつきり記憶していることも、茫洋としていることも、祐一は心の中で繋ぎ合わせ意識の流れとして何の矛盾も感じない。なお、辻の椅子は祐一の「孤独」も象徴している。

娘がいる丘

サキとユキオが生まれて七年が過ぎた。気をつけていたのに、八江が妊娠した。

「産むわ。二人も三人も同じよ」

八江はそう言って笑った。祐一は八江にすまないという気持ちもあったが、八江の言葉が嬉しかった。そのとき、ふたりはまだ蜜月のなかにいた。

八江に似て目が大きい、少し肌が浅黒い女の子をふたりは授かった。サチエと名付ける。

あれはサチエが三歳になったときだった。家族で春の花壇を庭に造っていたとき、サチエは庭で転んだ。ガーゼにオキシフルをつけて傷口を消毒したが、膝頭にこびりついた土と血はなかなか取れなかった。

「破傷風にでもなったら、大変や」
「大丈夫よ。よく消毒したから……」

明日は東京出張だ。泊まりになる。八江にサチエを病院に連れて行くことを頼むしかない。

一週間経った夜半からサチエは急に高熱を出し、全身が痙攣した。救急車で祐一が同乗して病院に搬送したが、ドアの音や廊下から入り込むわずかな光にも反応して痙攣を繰り返した。

祐一はなかで八江に対して、サチエを殺したのはおまえや、という憎しみに似た感情が増幅し始めている。

墓のある丘は天気の良いときは家の二階の窓から幽かに見える。祐一は毎朝、サチエの墓がある丘を遙拝した。家族だけの密葬の日、堪えた涙の分も含めて、涙は毎日目の奥から枯れることなく湧いてきた。仕事に打ち込んでいるときはよかったが、ふと力を抜いたとき、急激に悲しみが襲って、また涙が溢れた。

祐一はサチエの死をすべて八江の責任にし、彼自身は傍観者を決め込んでいた。事故が起きたあの日の晩に、祐一がサチエを病院に連れて行っていれば、彼女は助かったかもしれないのだ。八江を責めるなら、彼がああを安易に過ぎたことも責められるべきだった。彼は自分の狡猾さや冷たさや頑なさを知って恥ずかしくなったが、素直に認めたくなかった。「窓からあの子の丘が見えるから嫌や」

祐一は絶句した。そんな見方もあるんや、毎朝、娘のいる丘を遙拝する祐一は驚かされた。彼にとって窓から丘を眺め

あつげなくサチエは逝った。

「母さんが悪かったわ。病院へすぐ連れて行けばよかったのに……」

八江は小さな細い肩を震わせ、泣いた。そのとき、知った。八江が彼の頼みを無視したことを。しかし考えてみれば、祐一は双子とサチエの面倒を見させるだけで心から八江を慈しんできたのだろうか？

祐一は今も彼の心のなかだけに棲む幻の女美代子を求めて彷徨っている。情けないとおもうのだが、断ち切れない。意識しないでも胸の奥に滲むように湧いてくる。そんな男に愛想をつかすのは当たり前だとおもいつつ、反面嫉妬に似た感情を募らせ、自分の都合ばかりをおもい詰める男なのだ。

何か得体の知れない、心をすつきりさせない黒い霧がかかったまま、
「どうして病院へ連れて行かなかったんや」

祐一は同じ質問を繰り返した。
そしてサチエが逝ったとき、祐一は彼女の顔をそっと押さえて静かな眠りを願った。

られるのはサチエを忍ぶよすがだが、八江にとっては、苦痛でしかなかったのだ。これでサチエの墓に行きたがらない理由も分かった。祐一は八江のおもいなど何も理解していないことを知った。

八江は自分を責めていたらしい。サチエを殺したのは彼女だ、と。今、祐一はそれとまったく反対のことを考えていた。サチエを殺したのは八江から正常な考えを奪った自分ではないか、とふとおもったからだ。ここにも心穏やかに祐一の落ち着ける場所はなかった。

祐一の心のように止めどもなく心の安住の地を求めて列車は走り続ける。いつたい彼は何処へ行こうとしているのだろうか？ ただ彷徨い、しがらみに絡め取られて何処にもいけないでいる心のやさしさや優柔不断さを祐一は悔いていた。しかし彼の意識は流されるままに流れていこうとおもっている風でもあった。

何処へ

「人身事故の処理が終わり、新快速はま

通夜の晩、棺の周りを囲む家族、祐一はやはりここにしか居場所がないように感じる。いつも何処かへ行こうとしているけれど、何処へも行かなくていいのではないか、いや何処へも行けやしない、とおもった。

灯明が幽かに揺れている。

祐一はサチエを密葬して茶毘に付した。祐一は独断で隣町の海の見える丘にある墓地を買い、サチエに似た童女像を刻した墓石を造らせ祭った。八江には何も相談しなかった。墓が出来たとき、サチエの軽すぎる骨壺を八江とふたりだけで墓に入れた。

あのときから八江との間に心の行き違いというか、しこりというか、わだかまりというか、一枚の厚い紙をかみそりで二枚に剝いていくみたいなのでも現実にはない微妙な心の乖離を感じていた。

そしてそのおもいは祐一はなかで手の施しようがないほど膨らんで彼の心の変化に大きな影響を与えた。美代子へのおもいがすべての原因かもしれないのに、

もなく発車します」

目の前を下りの電車が発車していった。鉛色の風景が、馴染みのある城の景色に戻った。祐一はその風景が懐かしかった。祐一は携帯電話を取りだし、上司に電車の人身事故のため、午前十時の出勤は無理だし、会議にも出られない、と伝え

法一の事務所に電話をすると、
「今日はまだなんです。出て参りましたら、電話させます」

しばらくして突然、携帯が振動し、法一からだ。法一は「はあ、例の土地払い下げの件ですが……、だめと言うことで」と祐一は毅然とした口調で言った。電車が止まっている間、とりとめなく空想に、いや妄想に耽っていたが、これまでの心のなかを辿っても、結局何も変わらへんのや、何処にも行かれへん、足を踏み出せそうにない自分がいるだけだった。

祐一は目眩がした。

これから長い老後、嫌でも八江とふたりで暮らさなければならなくなる。妻と

しては別れて十八年。しかしずっと一緒に棲んできたのやから、我慢しかないの
だろう。

「初めて八江にあつたころのときめきを
取り戻すことができたなら、何処かへふた
りで旅に出たい、でもすまん、八江、俺
のなかにそんなおもいがひと欠片かたさえ浮
かんでこんのや、それは美代子が俺の心
を今も食べ続けているからやねん、と妄
想が祐一を空回りさせる。

「奥さん、出ていかへんのは、あんたを
好いているからや。おなごはんはな、気
に入つてなけりやあ、十八年も一緒にお
るかいな」

と独身を通して定年間近な、祐一の職
場を仕切る春日の局の意見だ。

「もつと変化に富んだ生活をしたいんで
すよ」

祐一は心のなかに美代子をおもい浮か
べて言った。

「アホかいな、どんな生活やねん？ 結
局みんな同じやで」

「そうやな、でも身体もろとも焼かなあ、
気持ちがかかわらへんとおもうんや」

そう言いながら、春日の局の言うとお
りや、何にも変わらない、と祐一は心の
なかでおもう。

でもな、美代子が現れたらどうしよう、
と未だにおもっている、このおめでたさ
は祐一自身も呆れている。美代子は空想
のなかに生きているからこそ昔のままな
のや。

「アホかいな、女がいつまでもあんたの
ことなんておもつてるかいな」

と八江が祐一の気持ちを知つたら笑う
にちがいない。もしかしたら、もういつ
ものようにすべてお見通しで密かに笑っ
ているかもしれない。

それでも八江を振り切つて昔のままの
美代子と何処かへ行きたがつている、相
変わらず浮き草のような自分がいた。ユ
キオは医学部を二つ受け、家から遠い大
学に合格した。

遅咲きの肥後梅が満開になった。
「もつと母さんを大事にしてな」

ユキオは言った。
祐一はあの原っぱから拾ってきた、磨
かれて鶯色に光る愛用の椅子に座つてぼ

んやりと聞いていた。

結局、祐一は何処へも行かなかつたし、
何処へも行けなかつた。ただ宙を彷徨い、
漂つていただけだつた。

祐一は空想から覚めてどこか光明のさ
す場所を見つけなければ、とおもつた。

●第二回神戸エルマール文芸講演会

は、講師に高嶋哲夫氏を迎え、六月
六日(土)、神戸市教育会館で午後
二時より三時半まで開催。演題は
「作家というお仕事」記録は左頁。

終了後は高嶋氏を囲む懇親会を、
三時四十五分より、隣のラッセホー
ル一階レストランで持った。講演会
参加者八十名。懇親会四十名。

●高嶋哲夫氏 1949年、岡山県
玉野市生まれ。慶應義塾大学工学部
卒業、大学院修士課程修了。日本原
子力研究所研究員。カリフォルニア
大学留学。日本推理作家協会、日本
文芸家協会会員他。